

学習形態 新型コロナウイルス非常事態のためネット上で講義。自学。

テーマ 『教行信証』とは何か。

— 『教行信証』撰述の意図 —

## 第二部

### 『化身土巻』に学ぶ（2）

今回から仲間がふえました。どうぞよろしくお願ひいたします。

前回から「化身土・真仏土」の方から、読んでみよう、という事になりました。その経緯は前回 9 回目の講義に述べていますので、ご覧ください。

前回は、『化身土巻』の最初、『観経』の存在意味というようなところをお話しました。

繰り返しますと、『観経』で韋提希は阿弥陀の浄土を選び取るわけですね。これによって、仏道が、釈迦生前中の説法と涅槃後の説法が成立していくわけです。つまり釈迦存命中とそれ以後という時間の領域において、仏教の普遍性を示す仏教が成立するわけですね。ですから、それ以来の私たちにとって、つまり未来の衆生にとってこの『観経』の仏身・仏土は絶対に必要なものとして受け入れるべきである、という事を意味してくるわけです。そして釈迦一代の教が、釈迦自身を超えた普遍的な教説となるわけです。

しかしながら親鸞は、私たちが立つべき仏身・仏土として肯定しながら、それを「憍慢界」「疑城胎宮」という言葉で批判してくるわけです。これが化身土の意味でしょう。肯定しなければならぬ自分の立脚地をまた逆に批判していく、だからと言ってそれを捨てるわけにはいかないという現実があるわけです。

前回は、そんなところで申しあげました。つまり『観経』は何を意味しているかと言えば、私たちの仏教全体、つまり仏教界全体を示しています。いわば、今もって釈迦存命の時の仏教を求めたり、釈迦涅槃時の姿を求めたり、釈迦滅後の仏教を求めたりしているのが、私たちの仏教なんですね。御自釈に「半満・権実の法門」(p326) とあるでしょう。「半満」とは小乗大乘の事ですね。そして「権実」とは方便教・真実教の事です。これを「半満・権実」という言葉でひっくるめて仏教全体を示しているわけです。

その仏教界全体を批判しているのが「化身土」だと思うんです。そうは言ってもそれ以外に仏教はない。つまり私たちの仏教界全体を批判し教誡されていく道としてこの『化身土』があったんだろうと思うわけです。

さて、課題 35、この命題がどういう意味を持っているのかを考えていきたいと思ひます。

**課題 35** まず、「化身土を顕わす」ということを、仏は『観経』の「真身観」の仏、土は『観経』の浄土なり、そして「憍慢界」「疑城胎宮」という言葉で言われ

ている。この一節は、「化身土」の命題として顕わされている。

(1) まず、仏ですが、第九観、真身観の佛ですね。これを『観経』で見てください。p 105 ですが、「無量寿仏の身相光明を観ずべし」とありまして「無量寿仏の身は」からはじまりまして、つらつらと述べられていきます。ここでまず「身相光明」という事を押さえておかなければなりません。そして、p 106-8「無量寿仏を見たてまつるは、すなわち十方無量の諸仏を見たてまつることを得るがゆえに、諸仏現前に授記す。これを第九の観と名づく」と述べられています。私はここの「授記」に注目したいと思います。

というのも、「懈慢界」「疑城胎宮」の表現は、『十地経』の「七地沈空の難」を顕わしているのではないかと考えているからであります。ご承知の通り七地沈空というのは、十地の内七地まで来ると、上に学ぶべき内容も無くなり、下に救うべき人もいなくなって、ただ空という覚りに埋没している状態をいうわけですね。そこから抜け出るには諸仏の授記が必要になってくるわけです。

この時の沈空状態を「懈慢」「胎宮」で示していると考えられます。「懈慢」とは懈怠驕慢の事。自分自らはそう思っていない、自分では怠けている、うぬぼれているとは夢にも思っていないわけです。だから、『十地経』でいうところの) 諸仏の加勸が必要なのわけです。

この『観経』の浄土というのは、私たちの仏教界全体を物語っているわけです。その私たち人類のことを「濁世の群萌、穢悪の含識」と言っているのでしょう。その私たちが「九十五種の邪道」(仏教以外の思想・心情等) から抜け出し「どんな教えの仏教に入ったとしても」真実なるものはほとんどなく、虚偽なるものだけが満ち溢れている、とされています。これが『化身土』が開かれていく命題となるわけです。せっかく「邪道」から出て仏教を求めても、邪道と変わりはないではないか、という事でしょう。この人々のことを「邪定聚の機」と捉えているわけでしょう。

この「邪定聚の機」をどのように救うべきか。ここに釈迦・弥陀が出てくるわけです。「釈迦の福德蔵」「弥陀の本誓願」ですね。この福德蔵そして誓願。この本誓願は漢文で見ると「本発誓願」となっています。ですから「本、誓願を発して」という事ですね。この「本(もと)」。ここに「すでにして悲願まします」という事を示していると思われる。そして「二河白道」の背景がここにあるといっても過言ではありません。

私たち真宗の教えを「釈迦・弥陀二尊教」と言われますが、これはどういう意味かと言えば、私たちが教わってきたのは、「釈迦は教主(教える仏)であり、弥陀は救主(救う仏)である」というわけです。この理屈はわかりますが、それじゃあ教えることと救う事と、別の事か。釈迦は教えることで人々を救ってきたのではないか。とするならば、一人の仏が行なってもいいのではないかと、むしろ佛の前である菩薩は、一方で覚りを求めて、もう一方では衆生を救う事を行って、佛に成っていくわけですから、仏の徳として衆生に教えを説き衆生を化していくわけですから。

ですから、ここで何故二尊にならなければならないのか、という問いが生まれてきてもおかしくはないはずです。このことを確認しておきましょう。この二尊教の背景には、先に述べたように、『観経』があるわけです。それは釈迦の涅槃です。釈迦の教法は普遍的に釈迦滅後も伝えることはできます。でも救いとなるとそうはいきませんね。

私たち（人間）は、いるかいなかもわからない神仏などに救いを乞うています。でも本当に救われているのか、誰も問題にはしません。そのことを追及しているのがこの問題なのです。釈迦が存在している間は問題はありませんが、釈迦滅後はどう救われるのか。

釈迦がおられる間は、その時その場において説かれるので、人は救われるという事は当然理解できることです。だから釈迦の教は方便の教というわけです。即ち時に従い場に従って説かれるという事ですね。つまり救済の具体性が示されるということです。

ところが、釈迦滅後の時代の人々はどう救われていくのか、そうなると釈迦はいないわけですから、釈迦の方便はできないわけです。したがって真実の教を説くしかない、という事になるわけです。そうなると釈迦にとって真実の教は「釈迦の微笑」しかないわけです。

その「釈迦の微笑」の中身は何かと言え、韋提希が阿弥陀の浄土を選んだという事に他ならないのです。言うなれば、浄土の縁が熟してアジャセたちに逆害を起こさせてきたんだ、と。そして韋提希に浄土を選ばせてきたんだ、と。それこそが阿弥陀の浄土が実存する真実の証なのである、(p331) というわけです。したがって、(p339)「観経には方便・真実の教を顕彰す」と言われるわけです。でも、「釈迦の微笑」と言っても具体的ではありません。その内容、という事になりますので、顕と彰を建てて、それは「彰」であるといわれるわけです。

(2) さて、次に「邪道から仏道に入る」という事ではありますが、一つ考えておかなければならないことがあります。私たちは「在家仏教」と言いますが、私たちが勘違いをしてならないのは、「在家」と言っても「邪道」ではないんだという事です。世間の邪偽を取り入れることではないんだ、という事です。やはり「邪道を捨てて」ということがなければならぬんです。

『観経』の願文を見ていただきますと「至心発願の願と名づくべきなり」(p327)とでてきます。そして『阿弥陀経』の願文は「至心回向の願と名づくべきなり」(p347)と言われます。発願と回向です。発願とは始まりの決意でしょう。回向というのは翻しです。転換です。転換は行き詰まりがなければ、転換はしません。

ですから、発願と回向は始まりと行き詰まりを示していると、私は思います。つまり言ってしまうと、発願回向というのは、自らの人生全体を言っているわけです。これを善導は「南無というは帰命なり、またこれ発願回向の義なり」(p176)と説かれています。ほんとに感慨深い気持ちになりますね。(親鸞は、これは如来の発願・回向であるとのべられていますが・・・私は我々の発願・回向と無関係ではないと思っています。

救われるという事は如来と私は無関係ではないという事。呼応するという事です。)

(3) 次に、「懈慢界」と「疑城胎宮」ですが、「懈慢」は「邪」を抜けたと思ひ込んで自らの中にまだ「邪」があることに気付かない姿を意味しているんだと思います。また「疑城」とは自らの「邪」を認めたくないの益々強固な城壁を作り他者と向き合わず、一人の世界に閉じこもってしまう、すなわち行き詰まりを意味しているんでしょう。

こうして考えてみますと、『十地経』の初地から七地までの事を述べているように思うのです。

### 課題36 「真仏土巻」において、12・13願の仏身の願が、なぜ仏土の願になるのか。

「すでにして願います」と「すでにして悲願います」との相違について。化身土が何故「悲願」なのか。

「化身土」において、仏身と仏土について分けて述べられています。それは当然の事です。それらは相対関係ですから、救う側の仏と救われる側の衆生分けられて当然です。という事は、この「化身土」は救われるべき空間の「土」としての浄土であるという事を示していると、考えることができるんじゃないかと思います。

ところが、今課題36において、「真仏土」では仏身と仏土が一つであることを述べているわけです。12・13願は仏身の願ですね。それがそのまま真仏土の願になるわけですね。ですから仏身の願が、なぜ仏土の願になるのか、という事です。そして「化身土」ではそうはならない。この二つを対峙して見ていくところに「化身土を考える」ヒントになりませんか。それがまず第一点。

そして真仏土は「願」で化身土が何故「悲願」なのか。という二つの課題に視点をおいて考えていきたいと思ひます。というのもこの二つは無関係ではないと感じています。

(1) まず、仏身の願がそのまま仏土の願に何故なるのか、という事についてですが、それについて、まず遡ってみると、法蔵菩薩が四十八願を起こされるのは、「我まさに修行して仏国を撰取し、清浄に無量の妙土を莊嚴すべし」(p13) という思ひからであります。つまり「浄土を建立する」という事です。ですから一願から十六願まで仏土(国中の内容)が願われています。その中に12・13願が入っているわけです。ですからこれを仏土の願とも見えるわけです。

それはそうとして、『真仏土巻』に戻ってみると、仏は「不可思議光」土は「無量光明」とどちらも「光」です。「光」という事は仏身が輝くという意味があります。釈迦の「五徳現瑞」など『教巻』にも取り上げられる要点でもあります。それからもう一つ「照らす」ということがあります。

つまり、仏身の輝きが他を照らしていくということがあるわけです。他を照らすという事は、そこに他者と場が必要となつてまいります。つまり空間です。言うなれば、仏身の光が「身」を超えて「土」を踏わっていく、これを「酬報」という言葉で示されているような気がします。「酬報」とは簡単に言ってしまうと「報われる」ということ。

仏身の誓願が国土にまで報われていくという事です。それを「報仏土」と表現されているのではないのでしょうか。

それはどういうことか、と言えば、自身の光が他を照らすための光であるという願心がある、という事ではないでしょうか。大悲の願心です。それだから、「大悲の誓願に」と言い、願心は大悲だけれども表面は「仏身の願」だから「願います」と言われるのでしょうか。

余談になりますが、「輝く」と「照らす」について、オリンピックでそれぞれ「輝いた人々」に感動させて頂きましたが、もう一面、ボランティアのスタッフが、会場を間違った選手に自らのお金でタクシー代を払い、競技会場に送り届け、無事その選手は入賞し「輝く」ことができた、という話がありました。これは「輝く人」の背景にその人を「照らした人」がいたからであります。

あともう一つ、どちらも「光」ではありますが、仏土の方は「無量光明」で「十二光仏」の名がついているのに、仏の方は「不可思議光」と「十二光仏」の名が使われていません。何故か。それとも「不可思議光」に力点があるのか、念頭に置いておきたいと思います。

(2) 次に、「すでにして願います」というところですが、ここで、この「すでに」はどこを起点として「すでに」と言っているのかをまず考えておかなければなりません。

まず、考えるのは、親鸞聖人が言ったので親鸞が起点？ ではないですよ。とすると考えられるのは釈尊ですね。釈尊存在時に「すでにして」願がおわしました、という事でしょう。そうすれば、先に釈迦とそれ以後の事を述べてきて、普遍と申しましたが、実はそれじゃあ不十分でしょ。釈迦以前にも仏教があった、ことで過去・現在・未来を通して完全に普遍的になるわけです。

ですから、釈迦よりずうっとまえから、光明無量・寿命無量の願、そして至心発願・至心回向の願は、ずうっと前から願われていたという事になるわけです。この前者は如来の願、後者は衆生の願ですね。この双方の願によって仏道を表現しているわけです。仏道とは佛だけで成り立つことではありません。佛と衆生の対峙において仏道は成立するんですよ。言うまでもないことですね。

釈迦の前生譚、ジャータカですね。これは釈迦が佛に成ることの因縁を説いたものですが、こうしてみると単なる因縁ではなく、釈迦以前にもサル社会に、鹿社会にも仏道があったとっていいのかもしれない。

(3) 次に、「化身土」が何故「悲願」なのか、について考えてみたいと思います。これは 19 願も 20 願もどちらも「悲願」ですよ。そうしますと、この二つの共通点は何か、という事になります。そういたしますと、「濁世の群萌」「濁世の道俗」を救うために釈迦と弥陀の二人の救済内容が述べられてきます。(P326) と (P347) です。言葉・語彙が多少違ってても、濁世の人々を救済するために釈迦・弥陀の二人が登場しているわけです。そこに「悲願」というべき深い思いがあるのではないかと察するのであ

ります。これを逆から言えば「濁世の道俗」がいかに救われ難いかを意味しているわけです。その救われ難い「私達」のために「化身土」があるんだという事です。『真仏土巻』の終わりに (P324) 「真仮を知らざるに由って、如来広大の恩徳を迷失す」と述べられているのではないのでしょうか。

ここまで、考察してくれば、『化身土』の最初から (p331) 「濁世の道俗、善く自ら己が能を思量せよとなり。」まで了解できるのではないのでしょうか。今回はこれぐらいにしておきます。ご意見・ご質問・ご感想など、なんでも言ってください。

ここの「己が能を思量せよ」という言葉は大事ですね。『教行信証』の「科文」がありますが、私は、科文よりは、親鸞聖人の「知るべし」とか「頂戴すべし」とかという言葉を中心に、学んでいます。その中でも、特にここの「己が能を思量せよ」、そして (p360) 「己が分を思量せよ」は、この「化身土」が私たちに訴えかけている心がひしひしとを感じるわけです。

ですから、私はこの「化身土」(本) は、その二つの言葉で三段に分けられていると思っています。今回はその一段目を読んだことでよろしいのでしょうか。また疑問点などありましたら、どんどん言ってください。待っています。 <つづく>